和田誠 W

三谷幸喜 M

それはまた別の話

W 初めて見た映画は何ですか。

M 映画館で見たのは「恐竜100万年」。八歳の時でした。

W ぼくは戦前に見た「肉弾珍勇士」というのが最初なんだけど。

M 「珍勇士」？

W 日本の添え物の短篇コメディですね。本篇が何だったか忘れちゃってます。テレビで初めて見た映画は？

M 憶えてないですねえ。テレビ映画の連続ものはよく見てました。「ベン・ケーシー」とか、「アンタッチャブル」とか。

W 「ミステリー・ゾーン」、「逃亡者」。

M 「ヒッチコック劇場」も。

W まだ小さかったでしょう。

M ええ。三つか四つで吹替えの熊倉一雄さんのことも、知ってました。「逃亡者」の睦五郎さんも。

W 読めたの？

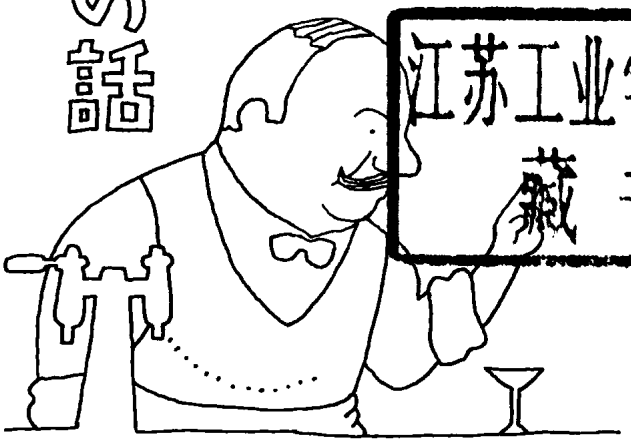
M まさか。母に読んでもらって。初めて自分のお金で映画館に見に行ったのは中学二年の時で、「フロント・ページ」と「オリエント急行殺人事件」の二本立。

W 本篇の対談に出てきますね、その話。

それはまた別の話
一九九七年一〇月二〇日第一刷
著者　和田誠
三谷幸喜
発行者　新井信
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　〒102
電話〇三―三二六五―一二一一
印刷　凸版印刷　製本　加藤製本
万一、落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛にお送りください。
定価はカバーに表示してあります。

© Makoto Wada, Kouki Mitani 1997
Printed in Japan
ISBN4-16-353400-8

それはまた別の話



江苏工业学院图书馆
藏书章

和田誠
三谷幸喜

文藝春秋

まえがき　和田誠　4

十二人の怒れる男　7

アパートの鍵貸します　39

舞踏会の手帖　73

フランケンシュタイン　113

ダイ・ハード　141

絶壁の彼方に　171

バンド・ワゴン 201
素晴らしき哉、人生！ 229
トイ・ストーリー 261
恐怖の報酬 293
エイリアン 323
裏窓 351
あとがき 三谷幸喜 385

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

和田誠

文藝春秋のＰＲ誌「本の話」編集部から「ビリー・ワイルダー　自作自伝」についての対談を依頼されたとき、「相手はどなたがいいですか」と担当者にきかれ、「うーむ」と唸ったら、「三谷幸喜さんは？」と言うので「大賛成！」とぼくは叫んだ。

三谷さんの書く芝居もテレビドラマも、ぼくは常々感心していた（と言ってもうんと初期は観ていない、遅れてきたファンではあるのだが）。そしてこの人はきっと映画が好きだし、ビリー・ワイルダーなんか特に好きなんじゃないかなあ、と考えていたのである。

三谷さんとの初めての対談は実現し、例の本のＰＲに少しは貢献できたかも知れないが、限られたページ数の中でたくさんのワイルダー映画について話したため、どうしても駆け足になってしまう。もっと落ち着いて映画の話ができればいいな、とその時思った。

駆け足対談でも、三谷さんは映画のディテールにこだわっていた。脚本家らしいこだわり方だった。そこで（漫画だったら頭の上に電球が浮かぶように）ひらめいたのは、映画を一本ずつ、ディテールまでしっかり話し合えないかということだった。

語りおろしの単行本でもいいし、雑誌の連載でもいい。三谷さんに提案すると、三谷さんはちょうど「キネマ旬報」から連載エッセイの依頼を受けているのだが、脚本の執筆が多忙なために色よい返事をしていない、しかし対談ならば執筆の息抜きになってちょうどいい、ということだった。

かくして「キネ旬」誌上で二号にわたって一本の映画を語る、という珍しい連載が始まった。一年二十四号分で十二本。映画史的な評価は気にせず、お互いにしゃべりやすいと思われる作品を選んだ。一回目だけはぼくが提案し、二回目からは各対談終了後、二人の合議で決めていった。

ちなみに、ぼくは一九三六年生まれ、三谷さんは一九六一年生まれである。

装幀　和田誠
装画　三谷幸喜・和田誠

十二人の怒れる男

12 ANGRY MEN

1957年アメリカ映画　日本公開1959年

STAFF

監督…シドニー・ルメット
製作…ヘンリー・フォンダ、レジナルド・ローズ
製作補…ジョージ・ジャスティン
脚本…レジナルド・ローズ
撮影…ボリス・カウフマン
美術…ロバート・マーケル
編集…カール・ラーナー
音楽…ケニヨン・ホプキンス

CAST

陪審員＃８…ヘンリー・フォンダ
陪審員＃３…リー・Ｊ・コッブ
陪審員＃10…エド・ベグリー
陪審員＃４…Ｅ・Ｇ・マーシャル
陪審員＃７…ジャック・ウォーデン
陪審員＃１…マーティン・バルサム
陪審員＃２…ジョン・フィードラー
陪審員＃５…ジャック・クルグマン
陪審員＃６…エドワード・ビンス
陪審員＃９…ジョセフ・スウィーニー
陪審員＃11…ジョージ・ヴォスコヴェク
陪審員＃12…ロバート・ウェバー
裁判官…ルディ・ポンド
衛視…ジェームズ・Ａ・ケリー
書記…ビル・ネルソン
被告…ジョン・サヴォカ

●上映時間　１時間36分
●受賞
ベルリン映画祭金熊賞、アメリカ批評家協会ベスト・テン入賞
1959年度キネマ旬報ベスト・テン１位、外国映画監督賞
1957年度アカデミー賞ノミネート・作品賞、監督賞、脚色賞
●ビデオ／ＬＤ＝ワーナー・ホーム・ビデオ

ストーリー

ニューヨークの法廷。殺人事件の審理後、お互いに名も知らぬ十二人の陪審員が評決のため陪審員室に集まった。被告は父親をナイフで刺殺した容疑で起訴された十八歳の少年。現場に残された証拠のナイフ、目撃証言などから有罪は決定的に見え、陪審員の多くは早く帰宅したがっている。しかし最初の採決で、第八番陪審員だけが無罪に投票した。評決は全員一致でなければならないため、残りの陪審員たちは有罪の根拠を次々と述べ第八番を説得にかかるが、逆に第八番はそのひとつひとつが根拠とはならないことを証明していく。白熱したディスカッションの末、少しずつ無罪に投票する者が増えていく。最後には強硬に有罪を主張していた第三番も折れ、ついに全員一致で無罪の評決に達する。

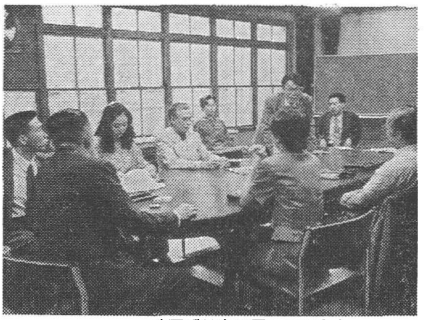
W（和田） 映画ファン同士の対談というのは、よもやま話になることが多いんだけど、この連載ではできるだけ一つの映画を、細かく語っていきたいと思っています。三谷さんは実作者であるわけですから、その辺のところからシナリオのうまさなんかを話してもらえるとありがたいです。

第一回に「十二人の怒れる男」をテーマにしようと思ったのは、三谷さんが「12人の優しい日本人」[1]という面白い戯曲を書いていらっしゃるからなんですね。あの作品は好評で映画にもなったわけですが、これは題名にしても「十二人の怒れる男」のパロディですね。けれども拝見すると、単なるパロディではなくて、独立したミステリーとしての面白さを十分持っている。僕は、あのとき、まだお会いする前でしたけど、この作者はいずれミステリーを書く人じゃないかなと思ったんです。だから、三谷さんのテレビドラマ「警部補古畑任三郎」[2]を見てやっぱり、と。

そんなわけで、「十二人の怒れる男」を、いつ最初にご覧になったかという話からいきましょうか。

M（三谷） 最初は、子供のときに見たテレビの吹替版なんです。とにかく、何て面白いんだろうって思った。僕は小さい頃から声優に興味があって、なぜか小山田宗徳さんのファンだったんです。ヘンリー・フォンダの声が小山田さんで、E・G・マーシャルの役が穂積隆信さん。子供のくせに、この二人はカッコいいと思いました。それ以来、見る機会がなかったのですが、ヘンリー・フォンダが亡くなったときに追悼番組で再放映したんです。それも吹替版だったんですけど、誰だったかは忘れましたが、声は違う人でした。その後、淀川長治さん主催の催しで「十二人の怒れる男」を一日だけ上映したのを見にいったんで

註1
舞台「12人の優しい日本人」（90年初演）作・演出　三谷幸喜と東京サンシャインボーイズ
映画「12人の優しい日本人」（91）監督　中原俊、脚本　三谷幸喜と東京サンシャインボーイズ、出演　塩見三省、相島一之
91年度キネマ旬報脚本賞受賞。


映画「12人の優しい日本人」

註2
「警部補古畑任三郎」（94年放映）
田村正和扮する個性的な警部補・古畑任三郎が、独特の捜査法でスマートに事件を解決していく一話完結の推理ドラマ。毎回多彩なゲストが登場。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すが、そのとき思ったのは、実は吹替版のほうが面白かった。

W　ははあ。

M　大勢がいっぺんに喋り出すんで、字幕だと何言ってるのかわからないんですね。

W　追いきれないし訳しきれないんですね。画面に映ってない人が喋ってることも多いし。

M　この台詞、誰の声だろうと思ったら、その後で顔が映ったり、と。その次に見たのが、舞台で、石坂浩二さんが出演した……。

W　ああ、石坂さんが演出もしたやつね。パルコでしたっけ。

M　そうです。それも面白かった。昔から四番を演じるE・G・マーシャルが好きだったんですけど、その役を伊東四朗さんが演じてらして、ああ、いいなと思って、知的でクールで、その当時は役者もやってたんで、自分が舞台をやるときにはぜひこの陪審員四番をやりたいと思ったんです。演出をしてみたいっていうのもあって。すごく真面目なドラマなんですけど、陪審員長が拗ねちゃったり、陪審員二番の人が、みんなが緊張して待ってるのに、秒針が上にくるまで時間を計るのをスタートしないとか、結構笑える部分があるんですよ。ぼくはそのまんまの台本でコメディとして演出できるんじゃないかなと思ったんです。でも先にエルム企画というところが舞台版を上演して、小劇場ではそれが決定版みたいな評価を得ていたので、いくらコメディ的に演出するとしてもそのままやるのはどうかと劇場の人に言われて……。

W　最初はオリジナルをやろうとしてたんですか。演出をコメディタッチにして。

M　はい。でも、だったらコメディとして新しいものを書いたほうがいいかなと思って、それで「12人の優しい日本人」が出来たんです。

僕の話はもういいですよ。映画の話に戻しますね。今日は和田さんにお会いできるんで、絶対にこれだけは聞こうと思ってたことがあって。ずっと疑問に思っていたんですけど、E・G・マーシャルが証言の中で、自分の見た映画として挙げる「驚くべきベインブリッジ夫人」って実在の映画なんですか。

W （笑）。いやあ、違うと思うんですよね。

M あ、やっぱり嘘なんだ。バーバラ・ロングという女優が主演なんですよね。結構、ボロクソに言ってますよね。

W 「安っぽい添え物だ」とか（笑）。

僕がこの映画を見たのは――まあ、僕のほうがだいぶ年寄りですから（笑）――封切りのときなんです。一九五九年かな。僕は大学を卒業した頃ですね。あの頃、この映画は、どちらかと言うと社会派ドラマとして捉えられていたような気がします。あの時期、「暴力教室[3]」や「誘拐[4]」など、いくつか社会派ドラマがあって、そういう興味で見ると、確かに人権の問題も描かれてるんだけど、繰り返し見てるうちに、これはミステリーとして楽しめるものだと思ったんですね。

M 法廷もののジャンルに入っていますけど、法廷ものでもないですよね。

W そうですね。裁判・法廷ものという、弁護士と検事が丁々発止やる、ビリー・ワイルダーの「情婦[5]」とちょうど同じ頃かな。オットー・プレミンジャーの「或る殺人[6]」というのもありましたね。でも、この映画のように陪審員だけがいるというのは、ものすごく特殊な世界で、それも面白かったですね。陪審制度というのは知っていたし、陪審員代表が結論を裁判長に告げる瞬間なんか、しょっちゅう映画で見てたわけですけど、陪審員がこ

註3
「暴力教室」（55）
監督　リチャード・ブルックス
出演　グレン・フォード

註4
「誘拐」（56）
監督　アレックス・シーガル
出演　グレン・フォード

註5
「情婦」（57）
監督　ビリー・ワイルダー
出演　タイロン・パワー、マレーネ・ディートリッヒ

註6
「或る殺人」（59）
監督　オットー・プレミンジャー
出演　ジェームズ・スチュアート

んなふうに討論することは、この映画で教えられたことです。それともう一つ、元がテレビドラマ[7]ということが新しかったですね。ヒッチコックなんかは一所懸命テレビの仕事やってましたけど、それはまだ珍しい例で、どちらかというと映画人にとってテレビは、脅威ではあったけど、ちょっと格下のものという認識があった。そこから出てきたものが採り上げられるのは、珍しかったと思うんですよ。

M 逆に「こんなのは映画じゃない」みたいな、そういう反応はなかったんですか。

W この映画は良く出来てますからね。本当に評判のいい作品だったと思いますね。ただ、向こうでも結果は予想できなかったんでしょうね。ヘンリー・フォンダ[8]は、そのテレビを見て、映画で自分も出演してやりたくなるんだけど、映画会社に話すと、「こういう地味なものは駄目だ」と誰も乗らない。仕方がないから自分がプロデュースして作ったんですよね。

M そうなんだ。

W 原作者のレジナルド・ローズ[9]とフォンダと二人でプロデュースをして、できるだけ金もかけない。フォンダ自身は、頼まれて出ればすごいギャラでしょうけれど、おそらくギャラはなし、というくらいのつもりだったでしょうし、リー・J・コッブは脇役として有名でしたけど、ほかはまだ無名というか、映画人ではなく舞台人をたくさん使ったり。幸いセットは小さな部屋があればいい。監督はテレビはやってるけど映画は初めてのシドニー・ルメット[10]を起用する。というふうにして、極めて安いお金で作ったと思います。その割にはすごく成功したんじゃないですか。

レジナルド・ローズの脚本は他にどんなものがあるかっていうと、「ワイルド・ギース」

註7
テレビ版は54年にCBSテレビ"Studio One"で放映された同名のドラマ。フランクリン・J・シャフナー監督、フランチョット・トーン主演。

註8
ヘンリー・フォンダ（一九〇五～一九八二）
ネブラスカ州生まれ。ミネソタ大学在学中からアマチュア劇団に参加。29年にブロードウェイ初出演、35年に「運河のそよ風」で映画デビューをはたす。出演作に「暗黒街の弾痕」（37）「若き日のリンカーン」（39）「怒りの葡萄」（40）「ミスタア・ロバーツ」（55）など。81年に娘ジェーンと共演した「黄昏」でアカデミー主演男優賞を受賞。

註9
レジナルド・ローズ（一九二〇～）
ニューヨーク市生まれ。ワーナー・ブラザースの広報係、空軍を経て、51年に初のテレビ脚本を発表。以後"Studio One"をはじめ多くの番組の脚本を手がけた。テレビ版「十二人の怒れる男」でエミー賞を受賞。おもな脚本に「暴力の季節」（56）「西部の

とか。

M　そんなのも書いてるんですか。確かこてこてのアクション映画ですよね。

W　僕の知ってる範囲だと「ワイルド・ギース」や「シーウルフ」を書いてるんです。それからゲイリー・クーパーの「西部の人」。これはリー・J・コッブが出てますよね。

M　僕が知っているのは、テレビで「弁護士プレストン」[11]を書いていたことくらいかな。

W　「弁護士プレストン」だとわかりますね。「弁護士プレストン」は、E・G・マーシャルですね。ローズって人はテレビだと実力を発揮するんだけど、映画は「十二人の怒れる男」を別とすれば、どうもあんまり合ってないって感じがする。

ヘンリー・フォンダ

M　あらためて見て、すごいなと思ったのは、被告が一体誰を殺したのか、最初は伏せてるんです。途中で「奴は父親を殺したんだ」という台詞があって、そこからは徐々にわかっていくんですけど、ふつう、どんな事件かぐらいは、先に言葉で説明しますよね。作家としては書いてて不安ですから。でも省略しても大丈夫なんだな、と。

W　そうですね。どういう証人がどういう証言したかというのも、最初にまとめては出さないで、小出しにしてますね。すでに六日間の法廷があって、その後の話し合いなので、彼らは事件のあらましはすっかり知ってるという設定だから、冒頭にそれを説明するのは、十二人の人たちにではなく、観客に説明するだけになっちゃうということなんでしょうね。

M　「12人の優しい日本人」を書いたときもそうだったんですけど、何が難しいかと言う

註10
シドニー・ルメット（一九二四～）
ペンシルヴァニア州フィラデルフィア生まれ。オフ・ブロードウェイの劇団や映画出演を経て、CBSテレビのアシスタント・ディレクターとなる。テレビ時代の五年間に五百本ものドラマを手掛け、その合間にブロードウェイの演出などもこなした。57年、レジナルド・ローズが脚本を書いたテレビドラマ「十二人の怒れる男」を映画化して注目を集めた。おもな作品に「女優志願」(58)「蛇皮の服を着た男」(60)「未知への飛行」(64)「質屋」(65)「セルピコ」(73)「オリエント急行殺人事件」(74)「狼たちの午後」(75)「ウィズ」(78)「プリンス・オブ・シティ」(81)「デストラップ　死の罠」(82)「評決」(82)「モーニング・アフター」(86)「旅立ちの時」(88)「ファミリー・ビジネス」(89)「Q&A」(90)「ギルティ」(93)など。

人」(58)「シャレード79」(78)「ワイルド・ギース」(78)「シーウルフ」(80)「この生命誰のもの」(81)「ワイルド・ギースⅡ」(84・V)など。

と、あの十二人は部屋に入ってきたときに初対面じゃないんですよね。裁判をずっと見てきてるわけだから。初対面だったら書きやすいんですよ。この、知り合って六日でしたっけ、こういうのが一番中途半端で難しいんです。昔からの知り合いだったら、会話もいくらでも湧いてくるんですけど。この映画はそういうのがすごく良く出来てて、親密に話しているんだけども、お互いの名前は知らないという、あの雰囲気がいいなと思いました。

W その前の六日間というのは、たぶん、お互いにそんなに顔を見合わせることもなく、法廷のほうを向いているんでしょう。

M でも、控室のようなものがあって、朝来て、「また今日も大変ですね」くらいは、たぶん言ってたと思うんですよ。

W ああ、そのぐらいはやるか（笑）。

M あと、この映画、好きなだけにちょっと気に入らない部分もあって、たとえば、あまりにもヘンリー・フォンダが偉そうだとか（笑）。あげ足取って「一本！」みたいなことを言うじゃないですか。

W ある意味では、そうですね。格好よく見えるけど。

M ええ。そういう不満があって、「12人の優しい日本人」では逆に、自分なりにどういうふうに発展させられるだろうかっていうふうに考えることができましたけど。

W 日本と制度が違うのに、あれを日本人でやったっていうのは、すごい度胸ですよね（笑）。

M 最初は、実際、昭和の初期とかに陪審制度が日本にあったっていうのを聞いて、その時代の話にしようかなとも思ったんですけれども。でもそうしちゃうと、その時代の実際

註11
「弁護士プレストン」（61～62年放映）
弁護士コンビのプレストン親子が難事件に挑戦する〝良心派〟ドラマ。出演はE・G・マーシャル、ロバート・リード。

の陪審制度の再現でしかなくなってしまうのが嫌だったんで、思い切っていまの日本にあったらっていうふうに設定を変えたんです。

W　あれは裁判長かな、最初に十二人の陪審員に心得みたいなことを述べますよね。「推定無罪」という言葉もあるし、小説も映画もあるんだけれど、あの原則をあそこで喋ったっていう気がするんですね。つまり、アメリカの裁判の基本というか、デモクラシーの基本というのは、どんな容疑者でも判決前は基本的には無罪なんだ。それを検事が一所懸命有罪を立証しようとして頑張る。陪審員はその検事の意見を納得するかしないかということで、それまでは白紙でいる。つまり、無罪と取りあえずは思っているっていうのが原則なんですね。その大前提を理解してないと、陪審制度がわからないような気がします。

M　本当、なんか大変みたいですね。陪審員、やってみたいですけどね（笑）。あと、今回見直して感じたのは、社会派ドラマであったり、ミステリーであったりするんですけれど、もう一つ、すごいドラマチックな部分、講談調というか、なんか『三国志』に通じるものを感じたんですけど。

W　群雄割拠みたいな。

M　その布陣がすごいなと思ったんですよ。一番の敵役のリー・J・コッブがいて、知恵袋みたいなE・G・マーシャルがいて、暴れん坊のエド・ベグリーがいて、お調子者のロバート・ウェバーがいて、この悪役四人組は完璧でしょう。それに加えて皆から嫌われている……

W　ジャック・ウォーデン。

話をわかりやすくするために、まとめましょう。陪審員一番がマーティン・バルサムで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com